新高退通信 No.147

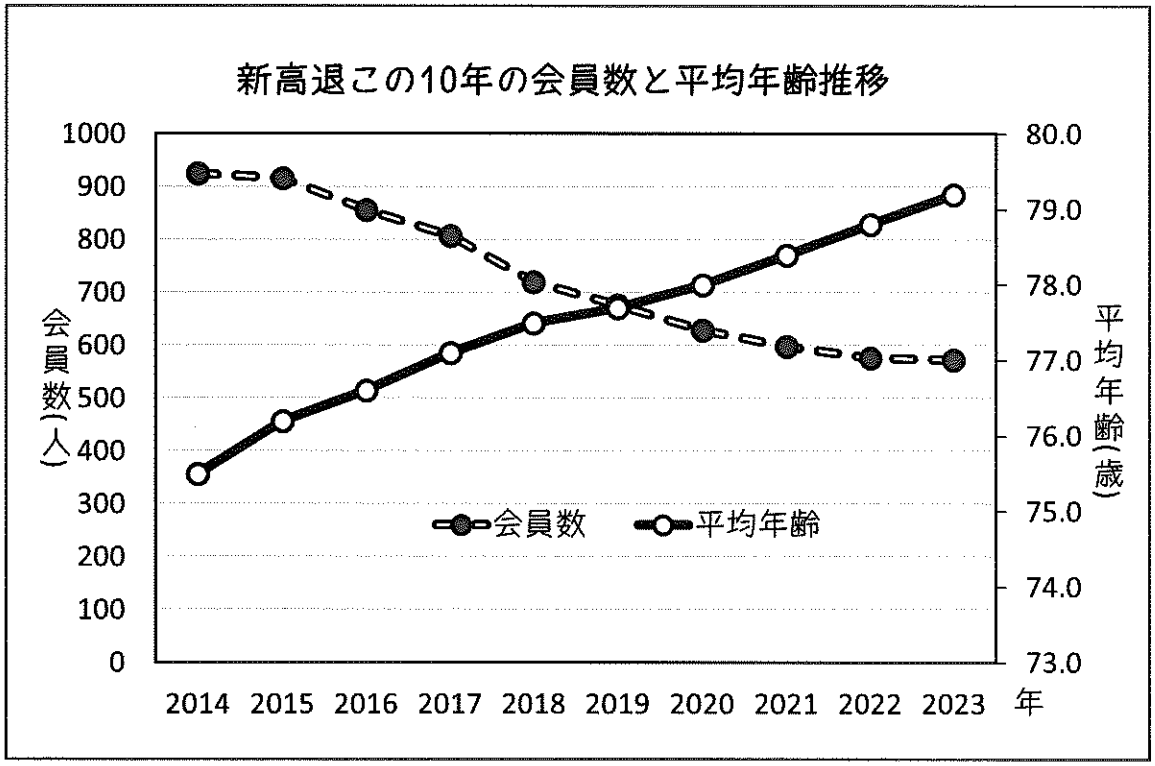
HP：shin-koutai.jimdo.com　mail：shin.koutai@gmail.com

新潟高教組

発行所／新潟県高等学校教職員組合／新潟市中央区川岸町2－11／ＴＥＬ(265)4151／ＦＡＸ(231)1036／1部10円
(購読料は組合費に包含)
発行人　遠藤　丞

2023年12月1日
号　外

新潟県高等学校
退職者の会
事務局
〒951-8133
新潟市中央区川岸町2-11-4
(高校会館内)
退職者の会専用電話
025-265-1110



新高退の組織と活動

なぜ、栃木旅行が実施できなかったのか

コロナの蔓延とともに「新高退は高齢者団体」という自覚もあって、２０２０年度から活動はほぼ休止状態で、３年が経過した。

今年度、政府の都合とは言え、新型コロナが５類に移行されたこともあって、会員の中からも活動の再開を望む声が出てきた、と事務局は受け止めた。

そこで、充分警戒をしながらもとりあえず旅行を募集してみようということになり、コロナで実施できなかった『栃木旅行』をリメイクして旅行の募集をした。

密を避けるために大きめの中型バスを確保し、20人のホテル予約、昼食会場の確保、見学箇所のパンフレット入手、と万全の準備をして募集をしたのだが締切が来てもほとんど申込みはなかった。

それでもコロナ禍前に参加してくれていた会員に、それとなく当たるが、最低催行人数の半分程度にしかならなかった。無理にお願いを続ければ、人数を確保することもできたかもしれないが、今回は一歩引いて中止の決断をした。

上の簡単なグラフを見ていただきたい。この10年間の会員数の推移と、今まで調べてこなかった平均年齢の推移である。一時１０００人以上を擁した会員数は、２００４年から漸減状況にある。これは高齢死亡を新会員でカバーできていないからで、おのずと平均年齢の漸増に直結している。この10年で平均年齢が４歳上昇し、79・２歳となった。

旅行が実施できなかったのは、コロナ時代に入り生活スタイルが変化したこと、これまで旅行に参加してきてくれた会員が一気に高齢化したことなどと推察されるが、新たな参加者が増えないこと、再任用制度や定年延長制度もあり、退職者の会の活動は全般的に見直す時期に来ているのではないか。

（内　山）

退職後の1年の小さな自分史

そろそろ……かな？

県央支部　細野修司（13）

「もう10年経ったのか……。」というのが正直な感想だ。

２０１４年３月に退職し、再任用元年だったが希望せず、非常勤講師の口があればやってもよいという生活に入った。再任用を希望しなかったのは、ほぼ同じ仕事をしながらも賃金が半減すると言われたからだ。ならば、賃金は激減しても自由度の高い立場を、と考えたのだ。以来、三条東、中越、三条、県央工、三条商と、市内の高校を中心にお世話になっている。「月金は外す」「１限には入れない」などの我が儘をきいて下さっている現役の先生方には、本当に感謝している。

さて、講師以外で継続しているのは、卓球の外部コーチである。退職時に、部員の保護者から要請されて以来、三条商業で現在まで続いている。他校の、再任用で顧問を継続している先生方や、現役の顧問の先生方と交流を続けられるのは、非常に喜ばしいことだ。

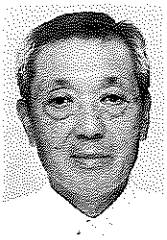
退職後のもう一つの生活の柱は、巨木巡りと里山の草花探訪である。特にコロナ禍以降は、密を避けて里山、低山をよく訪れた。あの神社に欅の巨木が、この寺に杉の巨木がある。この季節はあそこで何が咲いている。来週はあの山でこの花が咲くはずだ。等々、週末はまことに忙しい。草花は２週間で別の花の群落に入れ替わる。巨木も、大風で倒れたり、大雨で流されたり、あるいは伐採されたり、と油断できない。全てを見ようとすると、仕事なんかしている暇はない。

こうして、あっという間に退職後の10年が過ぎた。それなりに楽しく、それなりに充実した10年だった、と思う。しかし、この生活は退職前と殆ど同じものである。そろそろ、新生活を考えねばならないと思い始めている。「人生七十古来稀な」る年齢を過ぎたのだから、一度、時間に制約されない生活を送ってみたいという願望が芽生えてきた。

いつ講師をやめるか。いつ外部コーチをやめるか。なかなか、悩ましい問題である…。

あれから10年

新潟支部　扇　嘉明（13）



14年３月最後の勤務校であった新潟中央を定年退職、翌４月より新潟向陽で１年間のフルタイム再任用で第２の人生をスタート。しかし野球部顧問の欄に名があり唖然それでも練習試合や大会について行きました。昼食後の５限の授業が負担となり、次年より非常勤で向陽と新潟北の２校を１年間かけ持ち、その後向陽１校となり、途中ブランクがありながらも20年３月で完全にリタイヤ、それを待っていたかのように、母が他界しました。これからは地域と関わろうと小学生の下校パトロールを引き受けた途端に自治会の役員、ついには民生委員が回ってきて毎月９軒の高齢者のお宅を訪問し気づいてみたら多忙な第３の人生が待ち構えていました。14年８月に念願であったアメリカ東海岸のニューヨーク、ボストン、ワシントンを周遊、その後年１回くらいのペースで北ベトナムのハノイとその周辺、アンコールワット、息子の滞在先（当時）のタイへ２回、ハワイ、ニューカレドニアを訪れそしてやってきたコロナ。旅行は断念代わりに古くなった自宅の修復、高校野球の球場観戦、その最中長時間のスタンドでの腰かけの姿勢が影響し左腰に痛みを覚え激痛に変わり立つことも座ることもままならず医者へ行き椎間板

ヘルニアの診断、すぐに入院、手術。おかげで地獄から生還することができました。退院して1年が経とうとしていますが、おかげさまで今ではかなり回復し日課のウォーキングを暑さの峠の越えた9月より再開しました。以前より距離も時間も半減し30分程度に切り上げています。来年1月には新たに購入したマイカー納車の予定です。免許返納までどのくらい長く運転できるでしょうか。これが生涯最後の買い物かもしれません。

あっそういえば今年の8月スーツケースを新調してグアムに行ってきましたよ！

私の現況

佐渡支部　源田智江美（13）

新潟高教組には大変お世話になり、未熟な者を最後まで育ててくださったことを心から感謝しております。母校の恩師から声をかけられたことがきっかけで、理科の実習教諭として採用され、佐渡島内で働かせていただきました。

退職後、何か社会に尽くしたいという気持ちがあり、トキ博士認定講座や市民後見人講座にチャレンジしましたが、なかなか実用化はできず、私の能力資質のなさを再確認しています。

日曜日はキリスト教会に礼拝に行き、終日は家業である農業をしております。在職中は疎遠だった集落の方々やJA直売の方々との交流が増えました。

自身の体力能力が衰えていく中、健康の事や親の事、田畑の事等、神さまに祈り求めながら毎日を暮らしています。

退職後の日常

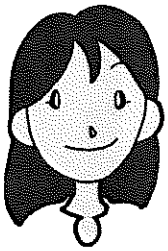
上越支部　船崎　聡（13）

現役を退き早10年が過ぎ去り齢70歳に成ろうとしていますが、いつの間にか年を重ねてしまったという思いで過ごしています。この10年間を振り返ってみると、退職後の1年間は非常勤講師として勤めましたが、それ以後は地域の町内会役員として忙しい日々を過ごして参りました。退職後は、悠々自適の生活を送ることを夢に見て国内の色々な所へ旅行したいと思っていましたが、町内会役員や民生委員としての活動等をしており、特に、この4年間は、新型コロナの影響もありどこへも行くことができず忙しい日々を過ごして参りました。

今は、いつまで出来るかわかりませんが微力ながら町内会活動や地域の発展のために力を尽くしたいと思っています。また、暇を見つけて国内旅行など色々な所へいってみたいと思っています。

15回目の挑戦

新潟支部　舟山弘美（13）



創作ダンスを通して、高校生・大学生・卒業生との関わりが続いている。

２０２４年２月４日午後１時30分、新潟市音楽文化会館ホールにて、ダンス公演「第15回ＴＡＹＩＣダンス部ＯＢＯＧとその仲間たち」が開演し、コンテンポラリーダンスを主とした20余の作品が披露される。出演者は主に大学生。高校生、ダンス部ＯＢＯＧの社会人も加わり、総勢約１５０名の出演。

退職の６年前、当時指導していた新潟商業高校ダンス部は全国大会「全日本高校大学ダンスフェスティバル神戸」のコンクール部門に挑戦し、ベスト８とも言われる特別賞を受賞した。この大会には、全国から「創作ダンス」の猛者（猛校）が集まる。その猛者達の作品を目の当たりにし、刺激を受けた生徒達は、受賞の喜びと共にダンスに深い世界を感じ、大学に進学してダンスを続ける者が現れた。そこで、「県外で学ぶ大学生に故郷でダンスを披露する場を作る」ことを目的として、実行委員会を立ち上げ、前述のダンス公演を企画し２０１０年、第１回を開催した。

以来、様々な方々から応援をいただいて、退職後も毎年開催をしている。現在は、「ＴＡＹＩＣ公演」の名称が広がりをみせ、新潟県出身者がいないのに出演してくれたり、大学側から出演の打診があったりもする。踊る時間が５～６分にも拘わらず、関東・関西から交通費自腹で来てくれる。嬉しい限りだ。

一方、公演の企画・運営は、新潟商業・新潟南・新潟中央他の高校ダンス部ＯＢＯＧで組織する実

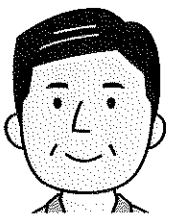
行委員会が担っている。対外的な折衝、打合せを経て、当日を迎える。代表は私だが、ＯＢＯＧ達の意欲・熱意があって開催が実現する。

退職後も私は南高校ダンス部の指導を続け、創作ダンスの魅力等を伝えている。ダンス部は、意欲的に取り組み全国大会でベスト４、ベスト８と称される結果を何回か残している。ダンスを愛する卒業生達が新たに公演の主役あるいは公演を応援する立場を担ってくれることを願う。

私は、これからも、踊る卒業生、支援する卒業生を育てていきたいが、私、もう70歳。

今が最高

新潟支部　前田啓二（13）



まさか退職後10年を経て、そんな境地になるなんて想像もしていませんでした。でも、根っから能天気なせいか、いつでも「今が最高」だと思っていたようです。退職時は未曾有の事態の、「年金は１年間支給されない」という思いもかけない状態になるなんて、「教員は退職後は悠々自適で海外旅行でも」という夢は消え去り、「話が違う」と狼狽したものでした。

現在は、現役時代より多忙で、貧乏暇なし状態です。バスケ全国制覇の開志国際高校で週16時間、新潟国際情報大学で３時間、その公開講座を週一ペースで非常勤講師です。他に、年商10億円に成長した、「ささえあいコミュニティ生協新潟」の監事で諸会議などに出席。月一の「井戸端ランチ会」主催。シェフを務めています。そして、青山８０ｓという、高校の同期会で作ったバンド練習を定例練習会月１回４時間半という、かなりハードな日々を過ごしています。バンドはライブも年に３回ほどやっています。もっとも、大学は70歳定年で、今年度で終わり、さらに監事の仕事も10年やったので、身を引くことにしました。私生活はもっと充実していて、幸せです。昨日は高校の古希の同期会もあり、52年ぶりの旧交を温めました。

さて、これからは少しは暇になれるでしょうか。自分のことは、後は終活だけですが、それにしても日本の将来には暗いものしかなさそうです。格付け会社に勤めている友人が「もう日本はダメだね」と言っていました。子供たちの将来が心配です。教育もタブレット、chatGPTの導入で危うくなっていますね。

現場から

上越支部　槇　博明（13）

古希を過ぎて「退職者の会」の活動もせず、非常勤講師として週14コマ（２校勤務）を受け持つ私に対して「お前さん、いい加減教員はやめて他の人に任せなさいよ」と言う人がいます。多分、今の教育現場の実態が理解されていないのだと思います。若い人は常勤講師としてなら、ある程度の収入が見込まれますが、非常勤という低収入ではなかなか仕事に就くのが難しいのが現状です。そこで退職者の中で誰かを、ということになるのですが、なかなか引き受ける人がいないのです。加えて、最近の現場の急速なデジタル化。アナログに慣れた世代にはかなり厳しいものがあります。

こんな現場に今だにいる私が、並外れて教育に高い理想と見識を持ち、生徒が大好きなのだと思うのは全くの誤解です。そうではなく、以前からの知り合いや、元同僚だった校長などから頼まれると「いや」と言えないのです。少なからず現場の状況を知っているだけに断る勇気が出ないだけなのです。

ただ、嫌なことばかりでなく、嬉しくなる時もあります。若い教員から頼りにされたり、生徒たちから信頼されていると感じる時です。

もしかすると医者からストップがかかるまで現場に立ち続けることになるかもと考えることもあります。

「退職者の会」には、私のように古希を過ぎても非常勤講師として、日に奮闘している仲間も少なからずいると言うことも、心のどこかに留めておいていただければ幸いです。

もちろん、高教組の中で学んできたもの、あるいはその過程で出会ってきた仲間のことは、心の中で絶えず生き続けていることも忘れてほしくありません。

絆をさらに深め、前への一歩を

日退教組織活動交流集会

10月13日、2023年度日退教（日本退職教職連絡協議会）組織活動交流集会がラポール日教済で開催されました。以下にその概要を報告します。

分科会に先立って事務局から「2023年度組織状況調査」結果の概要報告がありました。

□組織の現況

●61単会（県退教46、高退教15）。会員数40，953人。前年比2，397人減。2023年度新規加入は57単会で1，296人、前年比で216人増。女性会員は55単会、14，638人で全体の36％。女性会員0の単会は11単会）

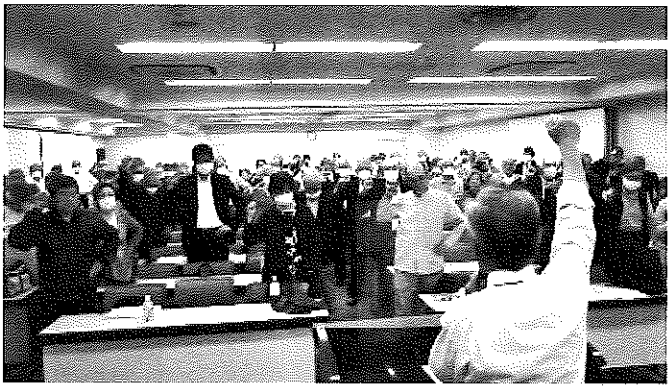
●各単会の会員数、0～99人、8単会。100～499人、28単会。500～999人、13単会。1000～2999人、1単会。3000～4999人、2単会

組織の現況をふまえて、再任用制度の維持、65歳定年制移行への試行的な定年1年延長等を考え、「現退一致による組織拡大」の組織上げての取り組みが執行部から提起されました。

□分科会の報告

分科会には平和、人権、組織、教育、文化に関する12のレポートが提出され、2分科会に分かれて報告、質疑応答がなされました。以下に第一分科会の報告をします。

●「組織強化に向けた北退教の活動について」（北海道退職教職員連絡協議会）（この下に支部に相当する24の退職教職員協議会がある）



現職組員の減少、教職員・組合員の意識変化、学校現場の多忙化・管理強化、組織攻撃等に起因する組織離れが進んでいると考えられます。年間60～80人の加入がある一方では、脱会、死亡を合わせて約400人の減少が続いている厳しい現況を打開するために「加入拡大に向けて、現職とつながる活動」をスローガンに掲げ、全道を5ブロックに分けて、現退一致でのブロック活動交流集会開催を企画し取り組んでいます。また、未加入者、過年度退職者を対象にして通年的に加入者増を図るために「加入強化月間」を設定して取り組んでいます。

●『教育のセフティネットについて考える―自主夜間学校の「いいあす京都」の挑戦―』（京都府退職教職協議会）

義務教育未修了者90万人近くという現実が2000年度の国勢調査で明らかにされました。

不登校、貧困、無戸籍等の理由で、実質的に義務教育を受けられないままに義務教育を終えた形式的卒業者、日本語を理解できない外国人労働者、十分な教育を受けられなかった在日韓国・朝鮮人等、「学び直し」や「日本語の習得」を求める多くの「教育難民」がいる日本の社会。

「子供の貧困対策に関する大綱」（2019年11月）により公立夜間中学校の設置、促進が図られることなりましたが、30の県が未設置です。（北陸地区では2024、25年度に石川県で設置予定。）

府内には「社会の縮図」と言われる夜間中学校があるが、制約があって「学び直し」を求めるすべての人が入学できるわけではないので、自主夜間学校「いいあす京都」（授業料無償、週2日の学習、現退教職員の学習支援）の設置、開校の運動に取り組んできて、5月27日に念願の開校を実現しました。「夜間中学校」と呼ばずに「いいあす京都」としたのは国籍、学歴、居住地、年齢等を問わずに「学び直し」を希望する人は、誰でも、自由に、との思い、願いを込めているからです。

開校に至までには多くの人からの理解、支援をいただきましたが、「きょうと教組」、「京都府退職教職員協議会」、「京都府部落問題研究資料センター」「京都部落解放センター」（週2日の学習会の場所は、センターの一室を無償提供）の人たちからの粘り強く、力強い支援があったからで、心から感謝申し上げるとともに、今後とも変わらない支援をお願いします。

（木　村）

２０２３・９・２０、地公三単産・地公退高齢者集会が開催されました。移住者と連帯する全国ネットワーク（移住連）山岸事務局長の講演要旨を掲載します。

《講演》誰一人取り残されない社会に向けて「移住・外国人」の人権課題から考える

講師・山岸素子さん（移住連事務局長）

［はじめに］

今、日本には、移民・難民・外国人ルーツをもつ人びとをふくめ４００万人以上の人々が暮らしている。このように、すでに移住社会になっている日本だが、「外国人」の人権は、日本人と平等には扱われてこなかった。「外国人」をめぐる歴史、コロナ禍での実態、入管法改悪問題などから、日本に暮らす移民・難民・外国ルーツをもつ人びとの現状と人権課題を知り、誰一人取り残されない社会に向けて私たちにできることを考えなければならない。

［世界に拡がる難民・移民］

難民・避難民は１億１，０００万人（２０２３年）、国際移民は２億８，１００万人（２０２２年）で、世界は移民排斥、排外主義に覆われている。

［国際社会での移民・難民の権利保障］

１９５１年に「難民の地位に関する条約」を採択。日本は１９８１年に条約を批准した。１９９０年に「すべての移住労働者とその家族の権利保障に関する国際条約」を採択。日本は未批准。

［日本の難民］

難民は２０２２年には３，０７５，２１３人（韓国、中国、ベトナムなど）で、在留資格別内訳（２０２２年末）は、永住者３０・９％、技能実習11・６％、留学10・７％など。

国際水準からかけ離れた難民認定制度＝難民認定率１％未満の状況が長く続き、難民申請中でも在留資格がない状態での収容や、難民申請中の医療や生活保障等で、基本的な人権の保障は極めて不十分。

日本政府の政策の基本は30年変わらず外国人に対する政策は、入管法による入国・在留管理に大きく偏っている。

それは、「外国人技能実習制度」という〝これまでの30年間変わらずの「労働力使い捨て」政策〟。しかし、定住する外国人は３００万人を超え、外国人はすでに、隣人、同僚、家族の一員として日本に存在している。

［コロナ禍での移民・難民の状況と支援の取り組み］

定住外国人でも、派遣、パートタイムなどの非正規雇用が圧倒的。技能実習生、留学生はそれ以上に仕事がなくなり、生活は困窮し、寮など住まいがなくなった。そのため、これまでの支援さえも困難な難民申請者・非正規滞在者が多くなっている。

［コロナの影響に対する移民連の取り組み］

取り組みの一つが新型コロナ「移民・難民支援基金」だ。特別定額給付金の対象外、その他特に困窮する移民・難民への１人３万円の現金支給。公的支援から排除される人々の生活を市民社会が支えなければならない状況だ。支援対象者は１６４５人。

コロナ禍を乗りこえて、共助と公助の必要性が強まっている。私たちは、差別や分断ではなく信頼と連帯をひろげ、すべての人々がともに生きる世界、排除しない社会を創る必要がある。

［入管法改悪反対の取り組み］

政府は長期収容や「送還忌避者」問題の解決のためとして、難民申請者中であっても複数回であれば送還を可能とする例外措置や、送還を忌避する外国人への刑事罰則導入などを盛り込んだ入管法改定案を２０２１通常国会に提出した。移民外国人支援・難民支援団体は、協働して、法案に反対し、非正規滞在者の送還促進でなく、難民保護や非正規滞在者の合法化を求めた取り組みを行った。２０２１年５月、政府は通常国会で法案を取り下げ、事実上廃案になった。

しかし２０２３年３月に岸田内閣は、２０２１年に廃案となった入管法改定案の骨格を維持したまま入管法案を閣議決定し、衆議院で、維新、国民民主賛成の一部修正案を可決し、６月９日には参議院本会議で法案が可決成立した。

［改定入管法の問題点］

今回の法案は、次のように、難民を虐げ、在留資格のない人の命を危うくするものだ。

国際基準に反する難民制度と低い難民認定率を改善しないまま、

難民申請者を強制送還できる仕組みを設ける。難民など帰国できない事情がある人に帰国を命じ、従わないと処罰する。在留資格のない外国人に対して司法審査を経ない無期限・長期収容の制度を維持する。新設の管理措置制度で、収容から解放された人に対して就労を原則とした上で、処罰対象にし、監視を強める。在留資格のない人への在留特別許可による救済の可能性を狭める。（2023年3月7日　移住連など7団体による声明より）

「入管法改定の目的は「送還忌避者」への対応」

2019年10月以降、入管庁は、「退去強制令状が発付されたにもかかわらず退去を拒む外国人」を指す用語として「送還忌避者」を積極的に用い始めた。「送還忌避者」は、3，103人（2021年12月末時点）。「送還忌避者」とよばれるのは、帰れない事情を抱えた外国人。難民をはじめ保護を必要とする外国人、本来在留が認められるべき外国人への対応こそが、問題の本質だ。

「収容・送還問題の真の解決策とは」

①収容制度を国際基準に改善し、②難民保護法制度を国際基準に改善し、③非正規滞在者を正規化することだ。

「2023年入管法改悪反対の取り組み」

明らかになった現行難民認定・収容制度等の実態と改悪法の問題に反対し、各地での改悪反対運動の広がりと連携し、さまざまな枠組みの改悪反対運動で、市民と野党の共闘で闘うこと。（声明・決してあきらめない～入管法改定案成立を受けて）2023年6月13日、移住連など7団体

「まとめ」

私達は、「誰一人取り残されない社会に向けて、外国人の排除ではなく共生のために」、外国人を管理、排除するのではなく、社会で共生していくための包括的移民政策を求めていく。

外国人の人権保障と人種差別撤廃のための基本法、移民基本法、難民保護法の制定を求める。

自治体における多文化共生政策の推進を共に行う。

地域社会、職場などでの共生の取り組みを行おう。

（石　野）

2023・10・12、5者（日教組・全国退女教・日退教・教職員共済生協・教職員相互共済会）合同学習会が開催されました。田中正敬さんの講演から印象に残った内容を以下に紹介します。

《講演》関東大震災時の朝鮮人虐殺はいつどこで起こったのか

講師・田中正敬さん（専修大学教授）

○流言はどのように拡げられたか

9月1日正午近くに震災が起こり、約1時間後に軍の東京衛戒司令部が「非常警備に関する命令」を出し、翌2日「非常徴発令」、「戒厳令」が発布された。街中では警官が流言をふれまわっていたという記録もある。流言は東京の下町や東海道筋、文京区周辺が多い。

通信手段と権威を持つ政府が流言を拡げたとの見方もある。当時、警視庁官房主事だった正力松太郎は1日の夜、新聞記者を集めて「朝鮮人が謀反を起こしているという噂があるから、各自気をつけろということを、君たち記者が回るときに、あっちこっちで触れてくれ」と頼んだという証言もある。

内務省からは2日に埼玉県の郡町村長宛に、東京に於いて不逞鮮人の妄動有之…この際町村関係者は、在郷軍人分会・消防隊・青年団等は一致協力して、その警戒に任じ、一朝有事の場合には、速やかに適当の方策を講ずる様至急相当御手配相成度と。3日には無線で各地方長官宛に、東京付近の震災を利用し朝鮮人は各地に放火し目的を遂行せんとし…厳密なる取締を加えられたしと打電の記録もある。

○関東大震災における殺傷事件の実態

東京では、1日夜半、月島で軍隊が朝鮮人を撲殺。2日の戒厳令施行以後、小松川他で朝鮮人を虐殺。3日、大島町で中国人虐殺。5日、平沢計七始め社会主義者が軍隊により虐殺。神奈川では、2日に高島町・神奈川・横浜港で中国人虐殺の記録、横浜およびその周辺で朝鮮人虐殺の記録。4日、

鶴見で自警団による朝鮮人虐殺。千葉・埼玉・群馬でも4日以降、自警団や民衆による朝鮮人の虐殺が記録されている。何故これらの事件が続発したのか、それは日本の植民地支配による内在的な恐れがあった。

○関東大震災朝鮮人虐殺から100年。現在の政府の対応

杉尾秀哉参議院議員（立憲民主党）「当時の記録はそのままコピーされて、これ国会図書館でしかもインターネットで検索できるんですよ。あるんですよ」

楠内閣官房長「政府といたしまして調査した限りでは、政府内に事実関係を把握する事ができる記録が見当たらなかったことから、仮にご指摘の史料を確認しても、その内容を評価することは困難であるというふうに考えているところでございまして、ご理解いただければと考えております」

谷国家公安委員長「政府内で事実関係を把握することができる記憶が見当たらなかった、ということでございまして、更なる調査ということは考えていないところであります」

（日退教ＨＰから）

このひと今（1）

北海道中 薄白髪（2艇のヨットの航海記）

新潟支部　松月秀一（05）

◆退職2年目の年に中古艇を譲ってもらい、念願のクルーザーオーナーになった松月さんは、その後もヨットと共に退職後の生活を謳歌し、この夏久しぶりのロングクルージングに挑戦した。

事務局で通信掲載原稿に苦労する中、その航海記録を「この人は今」の枠で寄稿していただけるとのことで感謝している。数回にわたる掲載になる。

愛艇と共に

それは2日目の朝に起きた。

粟島港から酒田港に向け意気揚々と出港した途端、エンジンからけたたましい警報音が鳴った。一瞬なにが起きたかわからなかったが、すぐにエンジンのスイッチを切った。

後続のヨット『WAVE』の松原さんが「水が出ていない」とさけんで教えてくれた。エンジンの冷却水が止まってしまったのだ。冷却水ポンプの故障かパイプになにか詰まったか、原因はわからないがこのままでは走れない。

松原さんが近づいてきてロープを投げてくれ、曳航して先ほど離岸した岸壁に再度係留して点検作業を始める。松原さんは整備士の資格も持っているので、いろいろ指示を受けながらあちこちパイプを外し、なにか詰まっていないか点検するが異常は見つからない。自分の感覚では給水口があやしいのではとの思いがあったので、水中メガネを付けて潜ってみると船底に開いた網目状の給水口にサランラップが詰まっていた。取り除き、9時10分に再出港する。

風のない平らな海を機走（エンジン走行）でしばらく行くと、今度は、すぐ後ろを走っていた松原さんから携帯で「スターンチューブ（プロペラ軸から水漏れを防ぐ装置）のビスが緩んで来ているのでエンジンを止めて直す」との連絡が入る。

沖合なので流されないように、2艇をロープで結び抱き合わせて修理作業を進めた。作業は30分程度で済み、ロープを解き、再度航行を開始した。後に強まった風と波にたたかれ苦労して酒田港に17時20分に入港した。

最初からこんなアクシデントに見舞われて「この航海が無事に済むのか」との不安な気持ちが頭をもたげる。多分、彼も同じような気持ちを持ったと思う。

実は、このところの新型コロナ騒動で、他県への船旅は遠慮していたこともあり、すでに以前の遠方へのクルージング（ロングクルージング）から10年もたっていた。2014年に北海道の奥尻島まで

行って以来、遠出していなかったのだ。

ではなぜ、今回、このクルージングに踏み切ったのか。理由はいくつかある。新型コロナもやっと落ち着いてきたこと。ヨットクラブの仲間から北海道へのクルージングに誘いがあったこと。また、今年、喜寿を迎え、年齢的にロングクルージングに挑戦できる限界の年ではないかとの思いもあって、今年が最後のチャンスと、思い切って出ることにしたのだ。

北海道へ誘ってくれたヨットクラブの仲間の松原さんと話し合い、6月中旬頃に出航しようと決め、コースや航海に必要な物の確認をし準備を進めた。

松原さんは新潟のヨットクラブに入る前から神戸や富山でヨットをやっており、操船技術は私より上だが、ロングクルージングの経験はなく、私に「北海道へ一緒に行きましょう。すべて松月さんの指示に従いますので」とのこと。彼をも安全に導かなければとの責任も感じる旅ともなった。

そのことも含め、いざ出るとなるとそれなりの覚悟が必要となる。

なんといっても自然が相手、いつも晴れて平らな海だけではない。荒れた海もある。安全な航海を続けるには、そのための〝見極め〟が最も重要なことで、いい加減な判断は命取りになる。

〝見極め〟なければならないものは広範にわたり、外的なものと内的なものの両方が問題なく整っていなければならない。外的なものとは、風・雨・霧などの天候と波高・潮流・漂流物・岩礁や定置網の有無などの海況。内的なものとは、寄港地間の距離設定・その港への入出の時間設定・航行中の食事（内容と時間）・体調などだ。安全な航海にするためそれぞれに対応できるよう、2人で相談しながら慎重に準備を進めていく。コース図を載せた航海計画書を作成して、クラブに提出し、両家族にも同じものを手渡した。

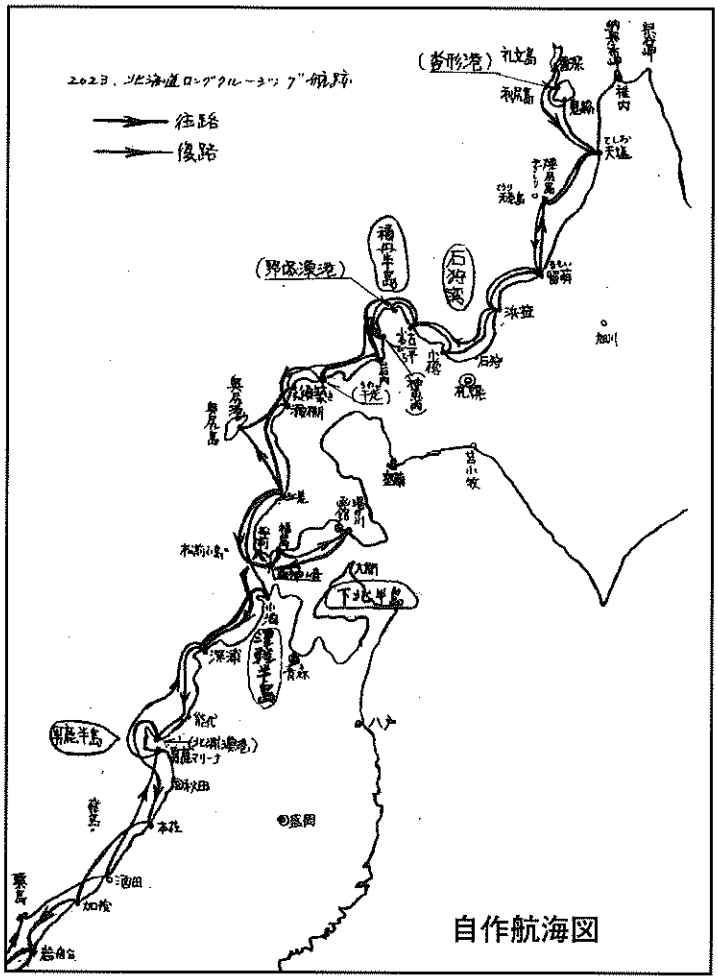
出航の日は6月20日に設定した。

その日が近づくに従い、航海への期待より不安の方が強くなり、今になっては大げさだが『無事に生きて帰れるのだろうか』との思いも強くなっていった。しかし、相手のいること、弱みは見せられない。覚悟を決め、航海の安全に最大限の判断と努力を惜しまず、ただただ安全に航海を終え〝生きて帰る〟それを自分に言い聞かせるしかなかった。

6月20日（火）出航の朝。5時起床、車で荷物を係留地の岸壁まで運び、一旦帰宅し妻と朝食をとり、送り出されて7時29分の列車に乗る。新潟駅よりタクシーで柳都大橋下岸壁へ。8時10分、松原さんと弟さん、それに作業に来ていたクラブ員の方と挨拶を交わし、1人愛艇『オリーブ号』に乗り込む。松原さんも自艇『WAVE』に。それぞれ準備作業を進め、9時に松原さんの弟さんとクラブの方の2人に見送られ、2艇そろって出航した。

10年ぶりのロングクルージングで久々なことや体力的なことで不安な思いが強いが、以前の1人旅の時と違い、今回は松原さんと一緒なので心強さもあり、責任もある、複雑な気持ちでの旅立ちとなった。

第1日目の目的地は行きなれた粟島港だ。うねりはあるものの、晴れて海も安定していて気持ち良く、『オリーブ号』と『WAVE』の2艇はあまり離れることもなく前後して快調に走った。後半、



自作航海図

風も吹き波にもたたかれたが、16時30分、無事1日目の航海を終えて粟島港に滑り込んだ。

ここで、航海がどのような船で、どのように進行するのか、少し専門的な説明をしたい。

まず、移動手段と生活の場としての艇（クルーザー）について、その構造と機能をみていく。ヨットなので当然、風をとらえて走るためのセール（帆）がマスト（帆柱）に取り付けてあり、走らない時や風のない時はたたんでおく。メインセールとジブセール（前方のワイヤーに取り付けてあるもの）の2種類がある。風の強弱により全部開いたり、半分にしたりして調整する。また、風の力で前に進むために船底にキールという重い翼状のものが付いている。

補機として、風のないときや港内を走行するためのエンジンも取り付けられていて、艇内の電気器具（外部灯や室内灯・メーター類・GPSや無線機など）に電気を供給するための発電もしている。船のエンジンは車と同じく水冷だが、車と違うところは常に海水をポンプで吸い上げて冷やし、役割を終えた熱水を、排気と同じパイプ（マフラー）から後方に放出している。この水の循環が止まるとエンジンが焼き付いてしまうので、先述した警報音が鳴ることになる。

生活の場としての機能だが、大小と数の違いはあるもののキャビン（室内）にはベッド・キッチン・トイレが設置されていて、家と同じだ。

次に、我々の航海は朝早く出発し、夕方までに（明るいうちに）目的地に入港するという安全を重視したやり方で、夜はリスクが大きいため絶対に走らないことにしているので、一日の半分以上は港内にいることになる。

その港の利用（使用）の仕方は、事前の手続きはせず、入港してそこの漁協に話を通し、空いている岸壁に係留させてもらうという方法だ。各地を巡っている他のヨットのほとんどが話を通すこともせず係留しているようで、言ってみれば、国道を利用する車のようなもので、どの道を走ろうがドライブインに入ろうが、事前に許可を得ているものはないのと同じ。

ただ、どの港でもいいということではなく、一晩、または数日生活する場所となる訳なので環境の整った港でないと苦労することになる。一番大切なことは食料を中心とした買い物ができる店があること、次に風呂に入れること、次に洗濯（コインランドリー）ができること、燃料の購入ができるスタンドがあること、近くにトイレがあることなど多くの条件がそろっている港ほど良く、そのような港を寄港地として選んでいるのだが、距離の関係で中にはほとんど何もないような港を選ばざるを得ないこともある。

3日目、風呂を探してあちこち歩き回った酒田の町を後にし、秋田の男鹿半島を目指す。今日は東風が強く吹くので留まることも考えたが、近くにいた漁師に聞くと「風はあるが、沿岸を行くには問題ないだろう」ということで出ることにしたのだ。陸側からの風は相当強く吹いても岸に近い沿岸部は波立たず、平らな海を進むことができる。ただ、逆に沖合からの風は大きく波立ち、荒れた海となる。

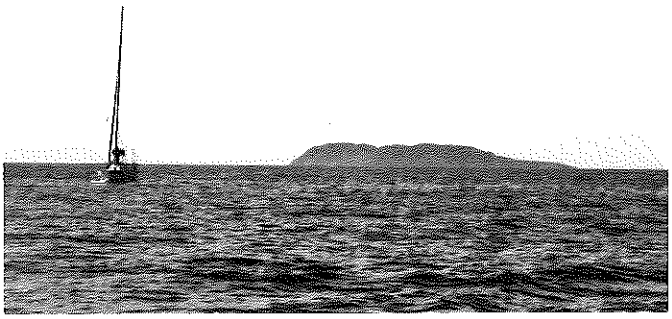
陸からの強めの東風を受けて2艇とも快調な走りで、普段より速い7ノット強のスピードが出ている。普段は5ノット前後のスピードで走っているので相当の速さだ。

1ノットとは1時間に1マイル（1海里）進む速さのことで、1マイルは1・852mだから、7ノット強のスピードとは時速13kmほど出ていることになる。車からすればものすごく遅く感じるが、水の上を走る船はそんなにスピードは出ない。佐渡汽船のカーフェリーでも時速27km程度だ。

ところが鳥海山の陰に入ると風も波もピタっとやみ、海は一瞬にしておだやかになり、そのスピードも普段通りのゆったりとした走りになる。

16時15分、男鹿半島の西側にある今日の目的地、「男鹿マリーナ」に2艇とも無事入港した。

『マリーナ』はプレジャーボート用の港湾施設で、



粟島をバックに走る

一般の港湾とは異なり料金を支払って停泊する。艇ごとの桟橋があり、そこに水や電気も引かれいつでも利用できるようになっている。付属する建物にはシャワー・洗濯機・喫茶コナーなどがあり、船の燃料用の給油所も完備されているところが多い。

粟島・酒田と風呂に入れなかったので、ここでは「道の駅おが」で2人ともシャワーを浴びた。

4日目、雨模様の良くない天気だが降水量は時間単位でも1ミリ以下で、風も少し強く吹く（6～8m）ようだがやはり陸側からなので、5時10分に出航した。

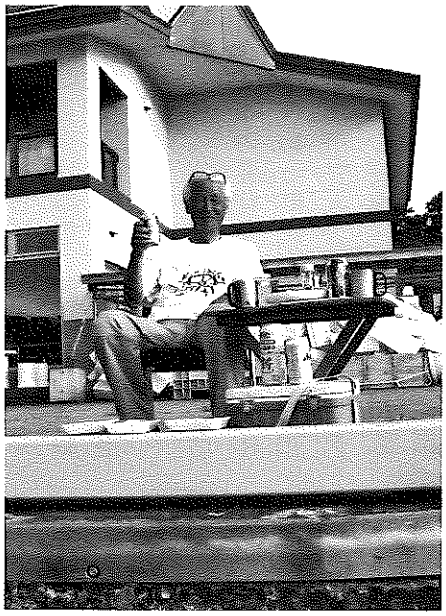
霧雨程度でほとんど気にならない天気の中、半島先端部の潮流に乗って7ノット前後で走る。7時30分、10年前に緊急避難した男鹿半島突端の『戸賀港』のすぐ沖を通過、8時20分、半島の先端の入道崎を通過する。入道崎灯台がすぐ近くに見えたので、それをバックに、すぐ脇を走る「WAVE」の雄姿をカメラに納めた。

しばらくやんでいた風が昼頃から吹いてきたので、メインセールも揚げて快調に走り、15時10分、青森県の深浦港に入港した。今日の航続距離は今回のロングクルージング中、最も長い距離だったが、順調に走り、ほぼ計算通りの時間で着くことができた。10時間という航海だったが海もほぼ平らで、夕方ではなくまだ太陽の高い15時という時間に着けたこともあり、疲労感はほとんどない。

しかし、ここまで一日も休まず4日間走り続け、知らず知らずのうちに疲れもたまっているだろうからと、2人で相談し「明日は出港せず休養日としよう」と決めた。

今まで不安も大きかったが、ここまで来て、2人ともになにか自信のようなものが芽生え、これからもなんとか行けそうな気持ちが出てきた。

（続く）



余裕が出てきた松原さん

『活動日誌』・点描

■事務局会議（7月19日）3年間実施を見送ってきた旅行を再開することにして、栃木旅行の実施を決定　■新高教定期大会（7月22日）自治労会館　■事務局会議（7月26日）■県退職者連合第31回定期大会、結成30周年記念祝賀会（7月26日）新潟東映ホテル、会長に山田太郎副会長が就任、引き続き木村会長は幹事に就任

■事務局会議（7月31日）『通信146』編集会議　■事務局会議、『通信146』編集会議（8月7日）■「立ちあがる会」石川多加子金沢大学准教授、中村直樹（会員）来局（8月7日）「立ちあがる会」長岡集会（12・9）の後援等要請　■事務局会議、『通信146』編集会議（8月21日）厚労大臣・デジタル大臣宛「2024年秋に予定される健康保険証廃止の撤回を求める団体署名」を日退教に送付　■事務局会議、『通信146』編集会議（8月28日）

■事務局会議（9月4日）、『通信146』発送（581部）

■「新高退囲碁の会」（9月8～9日）

『生きがい支援協会』の補助が終了したため、2019年を持って新高教囲碁大会は活動を終了した。

今回、佐野達哉さんが代表として当時の参加者に呼びかけて囲碁懇親会を開催。会場は五泉市咲花温泉の「ホテル丸松」。参加者は94本間眞澈、02渡部良一（新発田・村上）、02鈴木信義（新津）、05有坂勝（県央）、97堀行（魚沼）、04佐野達哉（上越）の6人。2日にわたり2回の総当たり戦を行い。久々の囲碁を堪能した。

参加者から、この「新高退囲碁の会」を全県的な囲碁同好会にしたいと申し出があり、事務局としても今後は同好会として扱うこととした。

■事務局会議（9月13日）■東電柏崎刈羽原発運転差止め請求訴訟第41回口頭弁論（9月19日）■戦争法廃止新潟集会（9月19日）集会・新潟駅前弁天公園、デモ行進4人参加　■日退教・退女教政治学習会（9月20日）「211国会を振り返りながら」水岡俊一（参議院議員・日政連）■地公3単産・地公退高齢者集会（9月20日）日本教育会館　■新退教50周年記念

式典（９月25日）新潟東映ホテル、木村会長来賓参加 ■事務局会議（９月27日）栃木旅行は参加希望が少なく中止の決定、年々進むさらなる高齢化とコロナによる生活スタイルの変化か ■９・30狭山再審を求める県民大集会（９月30日）新潟市弁天公園、古町までデモ行進、佐渡地区実行委員会の藤岡正典さん（02会員）が代表挨拶、情勢報告では石川一雄さんのアピールを代読。シュプレヒコールは**「石川さんは無実だ！／狭山差別裁判糾弾！／東京高裁は鑑定人尋問をおこなえ！／東京高裁大野裁判長は再審を開始せよ！」** ■事務局会議（10月11日）■護憲大会第３回実行委員会（10月11日）■日退教組織活動交流集会（10月13日）木村会長出席 ■「現退交流会の開催について」「『第60回護憲大会の開会集会』への参加要請について」を発出 ■教育をよくする県民会議幹事会・第12回定期総会・学習会（10月24日）「特別支援教育からインクルーシブ教育へ」講師・長澤正樹さん（新潟大学教職大学院教授）■事務局会議『通信147』編集会議（11月１日）

（石野）

編☆集☆後☆記

新高退の組織と活動

苦労して計画準備した「栃木旅行」を中止せざるを得なくなったことには落胆と挫折感を味わった。正直な話、これでもう旅行を計画する意欲はなくなった。これも様々な環境のなせる技で、事務局の努力でどうにかできるものではないだろうと思う。

事務局のメンバーの交代も進まない。全体の高齢化と再任用で事務局を担う該当者が激減しているためだ。EXCELが使いこなせて新潟に近いところに住んでいる若い人募集中。

退職後10年の小さな自分史

原稿を出していただいた会員はみんな模範解答のように退職後の生活を充実して過ごしている。いつも皆さんの活動や活躍ぶりに感心すると同時に、顧みて自分の情けなさを嘆く。

講演・誰一人取り残されない社会に向けて

講演主体の移住連は、新潟県人権・同和センターの「越佐にんげん学校」で毎年講師をお願いしている団体。外国人に対するひどい差別意識、人を人とも思わない扱いをそこで知った。そして、ウィシュマさんに対する名古屋入管の暴行致死事件。これは密室で行われた官憲による殺人事件と言ってもいい。

外国人の人権保障と人種差別撤廃のための基本法、移民基本法、難民保護法の制定が急務だ。

講演・関東大震災時の朝鮮人虐殺はいつどこで起こったのか

映画「福田村事件」を見た。関東大震災の時に行商に来ていた部落の人たちが、日本人による朝鮮人差別の巻き添えで虐殺された事件だった。

関東大震災では朝鮮人のみならず、中国人や日本人も虐殺されたが、政府が流言を否定せず、虐殺を容認する空気がつくられたことから、それを主導した日本政府の責任は大きい。

「この人は今」

新潟支部の松月さんがヨットで大航海に出たことを聞いていたので、活動が日退教くらいしかない中で、頼ろうと寄稿をお願いした。

退職してからヨットをものにしたことがすごいと思うし、高齢の身で大航海に出る決断もまねができないことだ。

原稿を読ませてもらうと、自然と向き合うには日頃の訓練、綿密な準備、慎重な行動が求められることがよく分かった。

（内山）

ご冥福をお祈りします

（括弧内は現職退職年）

歌城 正三 さん（90）（長岡支部）１・12

長ケ部 仁 さん（95）（上越支部）７・25

笹川 一郎 さん（02）（新潟支部）８・８

斎藤 信一 さん（09）（県央支部）９・13

廣川 司 さん（94）（県央支部）９・29

飯塚 篤夫 さん（89）（柏崎支部）10・30

小林 良一 さん（92）（新津支部）11・２